
ZOO

伊東歩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

NO

【著者名】

伊東歩

NO 884

【あらすじ】

俺はこの街で掃除屋をしている。もちろん、違う意味の掃除だ。依頼の数だけドラマがある。しかし、俺には何の興味もない。仕事は仕事、だ。

未熟なカナリア

例年より少しばかり早い初雪が観測されたと朝のニュースで知った。今日も夕方過ぎからちらほらと、雨とも雪ともとれないものが空から舞い降りている。街は早くもクリスマス一色となりつつある。イルミネーションが通りを彩り、クリスマスソングがそこら中から聴こえてくる。歩道橋の上から見るその景色はなかなか悪くない。冷たい風が吹く。俺は真っ黒いロングコートの襟を立ててそれの侵入を防ぐ。

「今年のクリスマスは独りだ。あんたも？」

隣にいる女が言った。真っ白いパークーにレザーパンツ。化粧は黒を基調とした濃い目のメイクだ。整った顔立ちはあるが、いかんせん俺は髪の短い女は嫌いだ。まあ関係ないことだが。女は歩道橋の手すりに背中を預けている。目線はさつきから空を見上げたままだ。

「雪が好きなのか？」

「んーどうだろ？ あたし北のほうの出身だから雪はあつて当然って感じだし」

俺はふと左腕を見た。腕時計だ。23時。まだ時間がある。つい30分ほど前、初めてこの大崎由美と出会った時のことを思い返した。

俺がここに来たのは20時にもなっていない頃だ。それからこの寒空の下何時間も立ち続けていた。俺がもたれていた手すりはすでに肌以上の温もりを持っているのではないだろうか。確認のため写真を取り出す。ボーカルの女が写っている。歳は20歳前後といったところだろうか。大崎由美。今回のターゲットの名だ。由美はこのあたりに住んでいるらしい。男女4人でバンドを組んでいて、メジャーデビューを目指し日々練習、ライブに励んでいるらしい。スタジオから4人で歩いて帰るのだが、この歩道橋の前で由美

は一人になる。調査済みだ。今日もいつも通り練習を終え、帰宅のためこの橋を通りはづだつた。ただ一つ誤算があつたとすれば、いつもよりも早いのだ、帰宅が。何気なしに目線を右にすらしたとき、数人のカップルや会社員風の男女に混じつて由美の姿が確認できた。ギターのケースらしい黒く細長いバッグを肩にかけている。時計を見る。22時半。これでは予定より長く会話をしなければいけないではないか。俺は人と話すのが嫌いだ。初対面の人間ともなると更にだ。しかし仕事だ、やらざるを得ない。そんな事を考えていると、何も知らない由美が俺の前を素通りしようとこりだつた。慌てて呼び止める。

「あの、申し訳ないが少し俺と話をしてくれないか？」
はじめ、由美は自分に投げかけられた言葉だと気付かなかつたらしく、歩みを緩める気配すら見せなかつた。

「ちょっと、聞いてるか？」

「え？ あ、あたし？」

よつやく少しだけ歩くスピードを落としてくれた。しかし立ち止まるまでには至らない。まあそれが普通だらう。横に並ぶ。

「何？ ナンパ？」

おどける様な笑顔。歩みは止まらない。

「期待に添えなくて残念だがそうじやない。勧誘でもない。とりあえず話をしてくれればいい。まあ無理にとは言わないが」

そう、別にここじやなくとも問題はない。多少面倒ではあるが。だが俺の予想に反して由美は更に歩みを緩めた。そして、止まる。

「あんた変な人ね。まあ帰つても寝るだけだし、ちょっとくらいならいいよ。」

「変なのはお互い様のようだな。まさか本当に止まつてくれるとほ。

「止めておいてそんな事言つ..ま、いいけどね。」

由美は肩からギターのケースを下ろした。手すりの足の部分に立てかかる。そして自分の背も手すりに預けた。そしてクリスマスは一

人だの出身がどこだのと喋った。しばらく沈黙が続いた。

「何か言わないので？」

「そうだな」

「そう言って三度腕時計に目をやる。そうそう進んではくれない。

「ずいぶん時間を気にしてるみたいね。何か待ってるの？」

「ちょっとな」

「あんた、私たちのファンってわけじゃないわよね？」

「残念ながら、ただの仕事だ。しかし何故だ？」

「何故分かつたかつて？当然よ。ファンの態度じゃないでしょ、そんなムスッとして黙つてるなんて」

鋭い、のか？俺の態度が露骨過ぎたのか？まあどうやらでも構つまい。

「何故バンドを始めたんだ？」

時間稼ぎの質問に過ぎなかつた。そんな事これっぽっちも興味ない。

「そうだなあ・・あんた『KROW KRUE』ってバンド知ってる？」「

俺にはこれといった趣味はない。ただ音楽を聴くのは好きだ。当然今由美が口にしたバンドも知っている。

「2年ほど前にメジャー『レビュー』してからずつとヒットを飛ばし続けてるやつらだろう。それが何だ？」

「高校一年の時、学園祭である男子生徒がそのKROW KRUEの曲のコピーを披露したの。凄かつた。一瞬で虜になつちやつてね。『ピーバンド』なのによ。その時思つたんだ、あたしの道はこれだ！つて」

「計算が合わないか？」

「メジャー『レビュー』する前よ。当然誰も知らなかつた。堀クンたちのお陰だな」

「堀というのはおそらくその『ピーバンド』の一人なのだろう。

「つてあれ？今計算が合わないって言ったよね？」

言われて気付いた。口が滑ってしまった。

「あたしの歳を知ってるの？さつき仕事とも言つてたけど、あたしと話すのが仕事？どうみても芸能記者じゃないよね」

腕時計を見る。もう少し時間がありそうだ。

「新沼健太を知ってるだろ？？」

「え？まあ、ね」

「彼氏だな」

「元、彼氏だよ。ちょうど1年前に別れた。あれ？こんな感じの歌詞の唄あつたよね」

由美はたいして面白くもなさそうに笑つていて。眞実を知つたらこの娘はどんな表情をするだろう？ふと試してみたくなつた。いざとなつたら冗談だと笑い飛ばせばいい。どうせ信じられるわけがない。

「そいつに依頼された。大崎由美を殺してくれ、と。俺は掃除屋だ、殺し屋ともいうな」

再び沈黙が訪れた。案の定、この男は何を言い出すのか、そんな顔だ。

「ケンタが、あたしを？」

軽く頷く。

「驚いた」

「だろうな。ついでに言つておくと指定日もある。12月9日。つまりあと20分もないな」

さすがに言い過ぎたか？今更冗談でしたと言つて笑つてもらえるとは思えない。

「12月9日か。ケンタらしい、一人の記念日だしね」

俺の話を受け入れているのだろうか？その上でこの態度だとしたらこの娘は相当な度胸の持ち主だと見えよう。何か聞いたそうな気配を感じた。まだ時間はある。付き合おうじゃないか。無言で促す。「その日あたしの誕生日なんだ。そんでもって、ケンタと付き合い始めたのが2年前のその日で、別れたのがちょうど1年後。そういう

えはなんだかんだで誕生日プレゼント一度ももらっていないや

思い出して悔しそうな顔をした。

「別れたくないって泣かれたんだけど、あれ、泣いてはいないか？まいいや、でもまさか殺そうと思うなんて。あたしだって別れたくないわけじゃなかつたのに」

そう言ってふくれつ面をした。そんな軽いものじゃないんだが。「お互に別れたくないなかつたわけだ。じゃあ何故そんな事を？」付き合い始めて半年くらいだつたかな？バンドのコンクールに出たんだけど、その時あたしはバンドにケンタに、でびつちも中途半端だつた。結果コンクールは不甲斐ないどこりじやなかつた。それで、どちらかに決めようつて思つたの

「で、バンドが勝つたわけか」

「そういうこと。ねえ、一つお願いがあるんだけどいいかな？」

「何だ？」

「あたしを殺すんだつたら9日になる前に殺してくれない？後ろ向いて喋つとくからさ、分からぬよ。あ、その前に一服」

由美はパンツのポケットからタバコとライターを取り出し、慣れた手つきで火を付けた。この娘は俺の話を本当に信じているのだろうか。もしかしたら「冗談だと踏んで、その上で話を合わせているだけかもしれない。どちらにしろ結果は同じなのだから構わないが。

「しかし何故9日になる前なんだ？」

由美は手すりから背中をはずし、俺に背を向けた。本気なのどうか？分からない。

「20歳になつちゃうの、あと10分くらいで」

「未成年がタバコ吸つちゃあ駄目だろ？」

俺がそう言つと由美は悪びれた様子もなく笑つた。

「そう堅いこと言わないでよ。あたしはね、大人になるのが怖かつた。今でも怖くはないけどやっぱり嫌。あたしはいつまでも夢を追いつづける無邪気な少女でいたいのよ。だから20歳になる前に殺

してほしいの」

そういうものか。腕時計を見る。そろそろだ。

「あたし病気なんだ。不治の病つてやつ？もつ長くはないかも。病院行つてないから分からぬ。バンドの皆には悪いけど黙つてる。療養で時間を削つてる場合じやないの。あたしはひたすら音楽つていつ夢を追いつづける少女なんだから」

時間も時間だけに通行人はさほど多くない。俺は誰にも気付かれぬようコートの内側からサイレンサー付きの拳銃を取り出した。「ケンタどこで知つたんだろ？多分それを知つたからあんたにこんな依頼をしたんだろうね。そうだ、あんたの名前を教えてよ。自分を殺す人間の名前も知らないなんてなんか嫌じやん」

ターゲットに名を名乗るなど今までにないことだ。しかしそれは聞かれなかつただけのこと。最期なんだし、いいか。俺は由美の耳元でそつと囁いた。由美は嬉しそうに頷く。

「いい名前ジャン」

これで最後だ。もう一度腕時計に目をやる。俺は由美の望みどおり少しだけ早く事を済ませる事にした。
「もしケンタに会つことがあつたら伝えてよ。初めてにしちやなかなかのプレゼントだよ、ありが・・」

言葉は最後まで発せられることはなかつた。タバコが指をすり抜け地面に落ちる。由美の体がぐらりと揺れる。それをすばやく抱きとめ、手すりに寄りかかるような形で両腕を掛ける。白いパークーの胸元からじわじわと赤いシミが広がる。俺は誰にも悟られぬようそつとその場を離れた。歩道橋を降りる。歩道から見るイルミネーションは、歩道橋からのそれとはまた違う表情を見せてる。これもこれで悪くない。数m進んだところで歩道橋を振り返つた。由美は先ほどと同じ姿勢のまま、心なしかほんの少し口元に笑みを携えていた。写真以外でまともに顔を見るのはこれが初めてだ。なかなかいい笑顔じゃないか。そして俺は今頃になつてふと、由美の歌を聴いてみたいと思つた。

扉を開けた瞬間に俺は顔をしかめた。その店はサラリーマンらしき男たちの笑い声や煙草の煙や匂いが充満していた。その中で僅かに感じられる料理の香りなど決して食欲を誘ってくれるものではなかった。居酒屋など何年ぶりだろう。

「おお、こつちこつち」

一人の男が座敷から俺を手招きしている。座敷に上がり、俺はうんざりといった表情でテーブルを挟んで向かいに座っている男を睨んだ。

「そんなムスッとしてんなよ。せっかくの男前が台無しだぜ」

男は名前を富樫明と言った。本名かどうかは分からない。一人の前に大きなグラスになみなみと注がれたビールが差し出された。

「じゃあとりあえず、かんぱーい」

無理やり俺にグラスを握らせ、割れんばかりに自分の持ったグラスをぶつけてきた。

「かんぱーいじゃない。何なんだ？突然」

富樫は一気に飲み干してしまった勢いで「ぐく」とビールを喉に流し込んでいった。しかたなく俺もひとくちだけ口に含む。飲み込むと、途端にびりびりという刺激とともに苦味が襲ってきた。俺はビルをはじめ全てのアルコールが苦手だった。4、5品ほど料理が出された。富樫があらかじめ注文していたらしい。それをつまみながら談笑をはじめた。と言つても笑っているのはもっぱら富樫だけだった。俺は一秒でも早くこの空間から出たいと、信じてもいい神に祈つた。ほどなくして胃が落ち着いたのか富樫は箸を置いた。グラスはすでに3杯目となつていた。

「そろそろ焼酎にしようか。」

まだ俺を呼んだ理由を言わない気らしい。いい加減我慢の限界だぞ。腰を浮かす。

「一人で盛り上がるんじゃない。早く話をしろ。でないと俺は帰るぞ」

「まあまあ待てよ。分かった、話すよ。あ、お姉さん焼酎お願い、芋ね。お湯割りで」

「ようやく話してくれる気になつたか。」ヒロは安堵のため息をつくべきだろうか。どうでもいいか。

「実はな、お前に仕事を依頼したい」

「は？」

いきなり何を言い出すんだ、この男は。富樫の前にビールのときとは違った形のグラスが置かれた。軽くくつとある。

「く、染みるねえ」

「そんなことはいいんだよ。何なんだ、依頼するだなんて」

「そのまんまの意味だ」

「そうか。じゃあその前に一つ聞いていいかな。お前の職業は何だ？」

「実はな、お前と同業者なんだよ」

「知ってるよ。しかも仕事の速さは業界随一だらう。お前がやればいいじゃないか」

富樫は残りを一気に飲み干した。

「分からぬいかな、それが出来ないから言つてるんじゃないか

「ということはダブルブッキングしてしまつたということか？」

「いや、その日の俺の仕事は一つだけだ。それは俺がやる」

「じゃあ問題ないな。帰るぞ」

俺が再び腰を浮かすと富樫は半ば必死に掴みかかってきた。

「まあ待てよ。十年来の親友だらう、とりあえず話だけでも聞こいつじゃないか、な」

「いらっしゃながらもとりあえず腰を下ろすことにした。ところよ

り富樫が手を離してくれないのでそしせざるを得なかつたのだ。

「で、ターゲットはこの男なんだけど」

そう言って富樫は一枚の写真をテーブルに出した。目を見張る。

それは俺の気持ちを動かすに足る力があった。

「なるほど、とりあえず話だけでも聞こうじゃないか」

無意識に先ほどの富樫の台詞を繰り返していた。

一週間が経つた。とある県立文化会館。ここが今回の仕事場所だ。といつても俺がいるのはその中ではなく、そこからすぐの高台にある公園。その滑り台の上だ。なんとも目立つ場所である。しかし調査の結果ここが一番のベストポジションのようだつたので仕方ない。今日はその文化会館で子供たちの音楽発表会が開かれているらしい。そこの観客の一人としてターゲットが現れる。どこの席に座るのかということまでしつかり確認している。でなければこんな場所から狙えるはずがない。俺は掃除屋ではあるがスナイパーではないのだ。腕時計を見る。開会まだ時間がある。そしてターゲットを仕留めるのは更に後、発表会も終わりの方だ。ずいぶんとめんどくさい仕事だ。俺は富樫に文句の一つでも言つてやりたかった。しかし富樺は富樺でもうすぐ仕事だらう。文化会館の周りが騒がしくなってきた。人が集まり始めている。

「ようやくか」

思わず一つ呴いてしまった。この位置からだと文化会館の観客席とステージが一部だが見渡せる。俺は徐々に埋まりつつある席を見ながら、ターゲットを探した。そして、

「よし、どんぴしゃだ」

それから2時間近くうとうとしてしまった。距離がさほど遠くないお陰で文化会館の方から微かに歌声や音楽、そして拍手が聞こえてくる。腕時計に目をやり、そして文化会館に移す。ステージに一人の女の子が登場した。めやすとなる子だ。あの少女が出てきたということはそろそろ時間だ。俺は気を引き締めるよう両手で頬を叩いた。

「聞かせてもらおうか。お前は何故こいつを殺したいんだ?」

一週間前の居酒屋。俺は田の周りをうつすらと赤く染めた富樫を問いただした。

「そもそも知ってるとは思うが掃除屋が掃除屋を狙うのは法度だぜ。もしそのことが業界で広まつたら、下手したら生き残らなければ」

つまり富樫の依頼相手は何を隠そう同業、掃除屋なのだ。

「分かつて。無理を承知で頼んでいるんだ」

「じゃあ一筆書いといてくれよ。私が依頼しました、みたいなのがわ」

俺はなるべく平静を保っていたが内心困惑していた。富樫が何故こんなことをするのか意味が分からぬ。

「俺が納得するまでちゃんと説明してくれよ」

と念を押した。

「分かつて。じゃあ説明するぞ。ある田の一つに一つの仕事が入つた。ターゲットは6歳の少女。怨恨かね、まあ珍しいことじゃない。こいつはあっさり引き受けた。そして早速仕事に取り掛かった。少女が下校の時一人になるのを見計らつて背後から近付いてつた

「簡単な仕事だな」

少し間があいたので俺は相槌を打つた。

「まあ簡単だ。しかし、そこでこいつはふと気付いてしまったんだ。この少女は自分の娘だと。その娘が幼いころに妻と離婚して、その元妻は再婚してたんだ。だから名前を聞いても分からなかつたんだな」

愚問だと思いつつ、俺は聞いた。

「それで、こいつは仕事をこなしたのか?」

めやすと定めた少女がもうすぐで歌い終わる。俺は余計なことを考えまいと全神経を集中させた。ターゲットと俺との間には文化会館の窓ガラスがある。その窓ガラスには直径4cmほどの丸い穴が

空いている。昨日までに俺が空けておいたのだ。丁度その穴の先にターゲットの男がいる。ステージの位置の関係でこちらに背を向けているが間違いない。歌が終わりに近づく。男が不審な動きを始めた。歌が終わり、場内に拍手が響き渡る。今だ。もう一度神経を集中させ、躊躇うことなく引き金を引いた。不意に男の動きが止まる。がっくりと首だけうな垂れる。俺は大きく息を吐いた。

「一週間後、文化会館で音楽発表会が開かれる。その時に仕留めると依頼主には言つてある」

「なるほど。そこで俺が殺ればいいんだな」

富樫は大きく頷いた。そして焼酎のおかわりを頼んだ。

「聞いていいか？何故自分の娘だと分かつたんだ？名前も変わつて、顔だつて分からなかつただろう」

「特徴があつたんだ」

「特徴？」

「娘は首の後ろに3角形を描くように3つのホクロがあつたんだ。それが、ターゲットの少女にもあつた」

富樫は水でも飲むかのように焼酎をあおつた。

「俺はこの仕事に誇りを持つてる。一度引き受けた依頼はなんとしでもやり遂げなきやならん」

「じゃあその娘を殺すのか？」

「俺に何もなればな。たとえば他の掃除屋に殺されるとか」

そう言つて富樫はにっこり笑つた。人懐っこい笑顔だ。

「なるほど、掃除屋が殺されればその少女を殺すよう依頼した人間への警告にもなるわけだ。次やつたらお前の命がないぞと」

「あの子には父らしいことを何一つしてやれなかつた。」

「俺には分からないな。他人の命を護るために自らの命を犠牲にしようなんて」

「いつか分かる時が来るさ。お前が父親になつたらな」

俺が父親になる日など来るのだろうか。

「「」のターゲットの写真、貰つていいか？」

「はつはつは、変わつた趣味だな」

拍手はまだ鳴り止まなかつた。どうやらあの少女の歌が最後の演目だつたらしい。観客は皆総立ちになつてゐる。ただ一席を除いては。そのすぐ後ろの席の女が妙に慌てたように落ち着きがないのが目についた。気付いたのだろうか。それにしてはあまりに騒がなすぎる。そこまで考えてふと思考を止めた。

「まあ、俺にはお前の依頼主なんて関係ないしな。」

ステージの脇からぞくぞくと子供たちが出て來た。とりを務めた少女が振り返つてそれを招く。首もとの3つのぼくろが印象的だつた。俺は滑り台の上でバッグから一升瓶とコップを取り出した。焼酎だ。それをなみなみと注いで、コートのポケットから写真を取り出す。

「乾杯だ、十数年来の親友よ」

居酒屋での富樫の言葉を思い出しながら一氣で飲み干した。喉、食道、胃と、熱い液体が流れ込むのを感じた。

「うげ、きつ」

文化会館に目を戻す。ステージには子供たちだけでなく大人もいる。おそらく子供らの親だらう。そうだ、子供の発表会には親が見に行くものだ。

「ははつ、良かつたな。最後に親らしいことしてやれたじゃないか」

俺は一升瓶を持ちばしゃばしゃと写真に掛けた。写真の富樫はどこか嬉しそうに微笑んでいるように見えた。

眠い。やけに眠い。いつからだらうへたしか今日の朝からだ。よほど疲れたらしい。しょぼしょぼとする目を擦りながら俺は地下鉄のホームに吸い込まれた。ホームにはほとんど人がいなかつた。たしかに少し遅い時間ではあるがそのせいではないだろう。もともとここの利用客は少ないのだ。電車が入ってくる。それに乗り込みドア付近の手すりにつかまつた。そのまま目を瞑つて地下鉄のゆれに身を任せていた。

「座つたら？」

不意に女の声が聞こえた。はじめ夢かと思った。

「ねえ、座つたら？」

まだだ。どうやら夢ではなさそうだ。振り返る。連結部側の3人掛けの座席にその女は一人で座つていた。20歳後半くらいだろうか。白のダッフルコートに青のスカート。いつも思うのだが女性はスカートなど履いて寒くないのだろうか。足丸出しではないか。まあそんなことはいいとして、

「何か言つたか？」

「だから、座つたら？つて。あなた眠そうだし、第一こんな空いてるのに立つてるなんておかしいよ」

周りを見渡す。2組のカッフルと数人のサラリーマン、OL。最後尾には学生らしき集団が地べたに座り込んでいる。
(いすに座ればいいのに。まあ俺も立つてるが)

つまり席はがらがらなのだ。たしかにそんな状態で立つたまゝうとうとしているのはおかしい。職業柄ついドアに近い位置にいたくなつてしまつのだ。しばらく迷つた拳句座ることにした。乗り気はしなかつたものの女性の隣に座つた。そこが一番近かつたのでそれが自然だろう。できれば初対面の人間の近くは嫌なので離れたかつたが、露骨にそんなことができるはずもない。しかしやはり立つて

いるのと座るのとでは全然違う。ふと意識が飛びそうになる。そうだ、腕時計のアラームをセットしよう。これでうつかり寝過ぎてしまう、なんてことはなくなるはずだ。安心して眠りこつける。夢に引き込まれそうになったその時だった。がさがさ。がさがさ。

(うるさいな。何やつてるんだ?)

隣の女性がなにやら自分のバッグをまさぐつている。

「何してるんだ?」

「あ、ごめんなさい。うるさかった?」

「いや、まあちょっと」

ちょっととじやなくだいぶだ。まあそれをはっきり言つぽど俺は子供ではない。少しくらい我慢してやろうじやないか。

「本を探してて。あ、あつたあつた」

それは今日買ったものらしく茶色い紙袋に入つていた。それをバリバリとあける。意外と音が立つものだなと思つた。袋をバッグに戻す。バリバリがさがさ。

(うるさいなあ)

そのとき、バッグの中になにやら物騒なものを見つけた。鍵だ。ただの鍵のように見えはするが、問題はその数だ。1本ではないのだ。数本の鍵がバッグの中ひしめきあつてゐる。俺の目線に気付いたのか女性が照れくさそうに笑つた。

「あはは、驚いた?まあそりゃそうよね」

「何なんだ?その鍵の量は」

女性は何かを言おうとして止め、ちょっとと考えて微笑んだ。

「さてここで問題。私は何をしている人でしょう?」

(いるよな、すぐクイズにしたがるやつ)

面倒だつたがしばらく付き合つてやることにした。無下にあしがつて寝ようとするのはさすがに失礼だ。

「鍵関係だろ? 美容師か」

「正解?いや、惜しい、かな」

女性は首を捻つた。

「問題出しどといて何だそれは」

「うんざりだ。まともでないなら静かにして寝かせてくれ。

「正解は、トリマーでした。まだ見習いだけだね」

「トリマー？ 聞いたことあるよつないような。

「うーん、分からん」

「ペットの美容師ってこと」

「ペットって、犬とか猫？」

「そう」

「そうつて・・・」

なんだつてペットの散発を美容師に頼まねばならんのだ。最近は何でも商売になるのだな。少し感心してしまった。

「まあ人殺しが金になるくらいだしな」

「何か言つた？」

「いや、何も」

さつさと話を切り上げて眠りたかった。今なら気持ちよく夢が見れそうだ。

「あなた、動物は好き？」

(またかよ)

うんざりしながら横田で女性を見た。

「まあ嫌いじゃないな。あんたは？」

逆に質問してやつた。そして思う、質問し返さなきや話は終わつてたんじやないか？ しくじつた。

「もちろん好きよ。じゃなきゃこんな仕事選ばないつて
まあそれはそうだるつ。

「私は日本一のトリマーをを目指してるので。そして私の手でいろんな動物をきれいに着飾つてあげたい

「夢を持つのはいい事だな」

「でしょ。あなたの仕事は？」

「サービス業だ」

質問されたときはそう答えるよつとしている。まあ間違つてはい

ないだろ？

「そう。それで、今から帰宅？」

「だな」

それから幾度となく眠りのふちに立たされるもその度に「ことじ」とくこの女性に邪魔されていた。そして、ようやく開放される時がきた。

「あ、じゃあ私ここなんで。それじゃ」

そう言って女性は立ち上がりた。俺の前を通り過ぎ、ドアを出す。と同時に、アラームが時を告げる。

（寝てないから意味なかつたな。）

「ちょっと待ってくれ」

俺は立ち上がりつてその女性を呼び止めた。ドアを挟むように対峙する。

「な、何？」

女性は驚いた様子でこちらを見ている。もしかして何か勘違いしてないだろ？

「いや、さつきちょっと嘘つっちゃってね」

発車のベルが鳴る。

「何を？」

「さつき仕事帰りと言つたが、本当は今からが仕事帰りなんだ」

「え？ それはどういう・・・」

不思議そうな顔をした女性の表情が一瞬で変わった。驚いたような、更に意味が分からぬといつような、なんとも言い表しづらい表情だ。ぐらりと体勢を崩す。それと同時にドアが閉まる。倒れた女性を残し電車は軽快に走り出した。

「ふあ～あ。眠い」

腕時計を見た。俺が降りる駅までは1時間近くある。十分に寝られるな。座席に座り直す。やはり知らない人間と座るより一人の方が気が楽でいい。

「やつと夢が見られるよ

言いながら意識が遠のいていった。そしてその途中で大事なことを思い出していた。
(そうだ、アラームかけ直すの忘れてた。)

小洒落た力フフとうといひはばぢうも馴染めない。かと言つて居酒屋や大衆食堂も苦手なのが。

毎過ぎの客の入りにしてはやや多いのではないだろうか。あちこちでわざわざと話し声が耳につく。この状況での唯一の救いは目の前にいる髪の長い女性だ。顔立ちも立ち振舞いも日本の好みに近い。その整った顔立ち、切れ長の目が見せる憂いは、なかなか艶美だ。

「具体的に聞かせてもらおうか」

俺は事務的に言つた。美しく好みの女性とはいえ初対面だ。さつさと終わらせたい気持ちは変わらない。

「はい。私には付き合い始めて4年にもなる彼がいたんです。自分で言つのもおこがましいとは思いますが、それはそれは仲睦まじい二人だったと感じていました。もちろん結婚も考えていました」容姿に合う透き通つた声だ。仕事でなければ聞き惚れてしまいそうなくらいだ。

「先ほど彼がいたと言いましたが、言葉のとおり今は昔。つい3ヶ月ほど前に別れてしまつたんです」

原因は?などと聞くべきだろうか。まあそうした方が相手が自分の話を聞いてくれていると感じるだらうし話やすくもなるだらう。だがいかんせんそんな話にこれっぽっちも興味が湧かない。それに、「その理由は」

ほらな。どうせこいつが聞かなくても向ひは喋つてくるんだ。余計な口を挟んで話を間延びさせたくない。

「ありきたりなんですけど、彼の浮気なんです。あれほど好きだと言つてくれていたのに、他に女がいたなんて・・・」

女は上品な手提げバッグからハンカチを取り出し目頭に当てた。その仕草は美しくも見えたが同時に茶番にも思えた。安いドラマの

ワンシーンみたいだ。

「殺し屋さん」

女が急に身を乗り出し俺の両手を掴んだ。とつさにカウンターを見舞わせそうになるくらい俊敏な動きだ。それより、「こんなところでその呼び方はやめてくれないか」

「」の3ヶ月間私は彼を必死に忘れようとしました。あいつは最低な男だった、別れて正解だつて。でもそれだけじゃダメなんです。詳しく述べせませんが、私は裏切られることが何よりも苦痛なのです。それこそ、死よりも」

潤んだ瞳で「ちらちらを見つめている。きらきらと光るそれを見ながら俺は思った。

（さとうなんぢやらも真つ青だな）

「それで、俺に依頼しに来たわけだな」

そこでようやく女が俺の手を離した。先ほどハンカチを取り出した小洒落たバッグを再びまさぐる。

「」の人です」

一枚の写真を取り出した。そこには綺麗な夕焼けをバックに仲良さそうに寄り添っている男女が移っている。女の方は今日の前にいるこの女だ。

「高原幸助、28歳。コンピュータプログラミングの仕事をしています」

聞いてもいないのに詳細を教えてくれた。そんなこと聞いても俺には何の得にもならないのだが。

「しかし浮気されたからといって殺すところはこそこかやりすぎではないのか？」

女はまるで睨むように上目遣いでこちらを見ている。

「先ほども申し上げましたとおり、私にとつて裏切りとは死よりも辛く、悲しいことなのです」

「だからそれと同じくらいの苦しみを味わわせたい、と」

女はこくりと首を縦に振った。俺の手を握ったときと同じくらい

力強い動きだ。よつやくその言葉を出してくれた、と嬉しそうにも見える。考えすぎだらうか。ちらと腕時計に目をやる。

「何か」予定が？」

「え？ ああいや、今何時かと思つて」

「お話中に時間を確認するなんて失礼ではないですか」

先ほどまでより若干力強い声でそう言つた。思わず「すまない」と謝つてしまつた。なかなか面倒くさい人間のようだ。周りに目をやる。先ほどより客が減つてきている。もう皆昼休みも終わり、午後の仕事をはじめている頃だらう。じきにこの店も客がいなくなるはずだ。俺たちもいつまでもここにいるわけにはいかない。店員に怪しまれてしまうからだ。

「依頼内容は分かつた。では少し質問してもいいかな？」

「何ですか？」

「今まで何人の男と付き合つた？」

女の顔にさつと警戒の色が走つた。

「何でそんなことを聞くんですか？」

「調査のためだ。君の話を十分信頼するに足る情報を得たい。」

「・・・2人目です。」

「前の交際は何故終わつた？ それも彼の浮氣か？」

「そうですけど、何か？」

「その男は殺したのか？」

「はい？」

女は明らかに苛立ち、警戒している。少しやりすぎたか。再度腕時計を見る。

「だからお話中に・・・」

「失礼、癖でね。では、やる場所はどこにする？」

「やる場所、殺す場所ですね？ では・・・ここでお願いします。」

「すいぶん早い決断だな。

「ここ、とはこの店のことか。何故こんな場所なんだ？」

「一人の思い出の場所なんです。」

女が悲しそうな、そして少し嬉しそうな表情を浮かべた。

「そうか。分かった」

俺はカップに少しだけ残ったコーヒーを飲み干すと、伝票を持つて立ち上がった。女がそれを見て慌てて立ち上がろうとする。手を出してそれを制する。

「座つて待つてるといい」

女は俺の言葉に素直に応じ、椅子に座りなおした。

「ありがとうございます」

レジは女の後方にある。女の脇を通り抜けレジへと向かう。その一瞬で十分だつた。女は背もたれに体を預け、頭だけうな垂れる。瞬時に見て死んでいるとは誰も気付くまい。

「二人の、因縁の場所なんです」

4日前。俺はどうしても馴染めない小洒落たカフェに来ていた。はじめに殺す場所を指定してきたのは初めてだ。よほど怨んでいるに違いない。

「俺には付き合い始めて4年になる彼女がいました。真剣な交際で、もちろん結婚も考えていました。でも、山村静子。あいつのせいで俺の人生はめちゃくちゃだ。殺してやりたい。お願いします」

怒りに任せて言いたい放題の男の言葉に耳を傾けるはずもなく、俺は聞いている振りをしてぼんやりとコーヒーを飲んでいた。数十分後、ようやく男の口が止まった。

「つまりこういうことか？その山村静子という女が、この店であんたを見て一眼ぼれした。そしてあんたの彼女を脅して別れさせ、自分が彼女になつた。それを知つたあんたが別れ話をすると、女はストーカーになつてしまつた。こんな感じでいいな？」

「はい」

なんだ、5秒で済むではないか。俺の数十分を返せ。

「あの時あの女に会わなければ今ごろ美紀と結婚していたはずだ。仕事だつて順調にいつたのにあの女に邪魔されて・・・」

「悪いがそういう話を聞くのは仕事のついにはいってない。どうしても聞いてほしいなら電話相談室にでも電話かけてくれ」

「あ、すいません」

「その女の写真あるか？」

「は、はい」

男がジャンパーのポケットから一枚の写真を取り出した。綺麗な夕日をバックに男女のカップルが寄り添つて写っている。それを見て俺はおや、と思った。

「これが、美紀に別れを決めさせた写真です。私たちは付き合つているのだからお前は身を引け、と。でもよく見てください。仕事柄よくパソコンいじるんですけど、これすぐ替えなんです。俺と美紀の写真をどこからか入手して、自分の顔を貼り付けた偽物なんですよ」

よく見ると顔と首の肌の色が微妙に合っていない。なるほど、さきほどの違和感はこれか。

「俺がこれを見なければずっと知らないままでした。でもこれを見て真実を知つた以上、放つてはおけない」

しかし一時は付き合つた女だろう? そう思つたが口にはしなかった。まあどんなにいい女でもこんな裏の顔を見せられたら百年の恋も冷めるというものか。

「自分なりに調べてみたんですけど こう見えて顔広いんですね 女、どうやら前にも同じような事をしてそのうち何人かは死にまで追いやつてるみたいなんです。おそらく、あなたみたいなプロに依頼して。でなきやとつに捕まつてははずだ」

「この男どんな情報網を持つているのかと気になつた。

「この手の女に俺も一度依頼を受けたことがある

□に出てから気付いた。何故こんな話をこの男にしているのか。まあ暇だしいか。

「手を貸したんですか?」

「仕事をしたまでだ。俺には関係ないしな」

男はしばらく絶句していた。無理もないだろう。下手したら自分が今日の前にいる男に殺されていたかもしれないのだ。うつむき、ぽつりと呟く。

「男なしに生きていられない女なんでしょう。本性を露して近づき、いざとなつたらその皮を脱いで襲い掛かつてくるんだ」

普段は猫を被っているわけだ。写真を見る。なるほど、この通り目は猫に似ている。

支払いを終え扉へと向かう。店を出ると、女の背に田を向けた。その姿はまるで男にフラれ、がっくりと肩を落としているようだつた。まあ状況はあながち間違つていらないかもしないな。そしてふと女のつり田を思い出して呟く。

「裏切られるより死がいいんだろう? 望み通りにしたまでだ。化けて出るなよ」

俺だけだろうか、猫は他の動物より靈的なものを感じる。化け猫はいても化け犬など聞いたこともないし。店を出た途端黒猫が俺の前を横切つた。去つて行く黒猫の背を見て、また呟いた。

「化けて出るなよ」

黒猫はちらとこちらを振り返り、にやあとひとつ鳴いて去つていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9884/>

ZOO

2011年1月26日22時55分発行